

学びのポット(第2学生ラウンジ)の活用

北棟2階の学習室（旧教員室）を在校生の皆さんに開放しております。現状としては、時間が空いた時に静かに自習したり、友達とお昼休みを楽しく過ごしたり、教員とマンツーマンで基本的な項目を学んだりする学生が少しづつ増えています。部屋が混んできた場合、近くの小部屋（第2研究室・第2面談室）も利用可能となっております。

最近の本校学生たちの様子を眺めていると、特筆すべきことがあります。まずは国試対策の準備をしている理学4年生でしょう。ある学生は1コマ目から4コマ目にあたる時間帯を第2学生ラウンジで自学自習しています。テーブルが広く、また、静かに集中できる点が魅力だと話していました。要望としては、コーヒーや緑茶が飲めるケトルのような備品を揃えて欲しいということでした。他の学生も気に入った場所で学んでいます。

理学療法学科に特徴的なことは、質問するためには学生個人あるいはグループはまずは教員室にきます。教員は手分けして、グループ学習者を対象としたミニ講義や個別対応を行うからです。このような状況は教員室に少しづわつく感じを与えています。

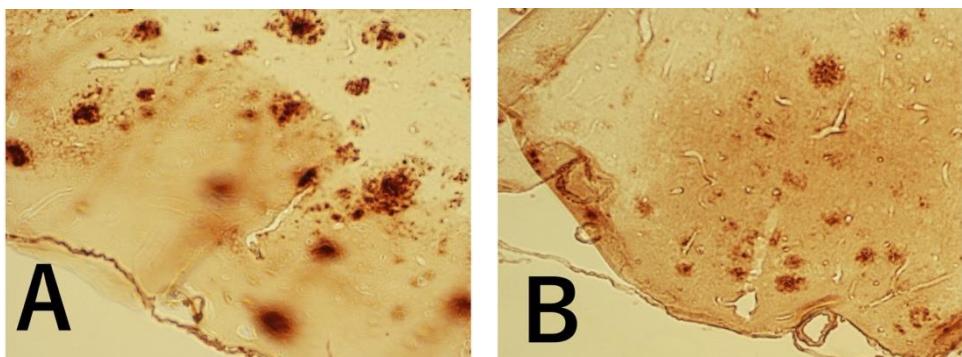
しかし、熱心に学ぶ学生たちの熱意と真剣に指導している教員の声が、いままで受験シーズンだという真剣さを伝えてくれます。心の中では、全員合格してほしいと願うばかりです。

看護学科では、自分達の教室がある建物に学生ラウンジがあるため、気軽に昼休みや昼食を楽しむ姿が見受けられます。お昼休みや夕方、教員もこのラウンジにつめているため、和やかな雰囲気があります。今年度の看護学科3年生は、国試対策をとても熱心かつ意欲的に進めており、質問があればグループごとに教員室に質問に来ます。普段は空いた教室でグループ学習していますので、そこに教員が様子を見に行ったり、指導に入ったりしています。それゆえ、第2学生ラウンジを必ずしも必要としない学生グループも少なくありません。ただ、学習に対する真剣度があまり高くない1～2年生にはもっと活用してもらえたると願っています。

作業療法学科の学生さんは各クラスの教室で学習したり、それぞれのグループに割り当てられた教室で学んでいる姿が印象的です。教員室で自己学習しないと指示されている学生もいますが、少なくともそこでは集中しています。

帰宅時に教員駐車場から校舎を振り返ると、2～3の教室から明かりが漏れており、国試対策を熱心に進めている学生たちが想像されます。一方、低学年生の中には教員とマンツーマンで補習している学生もいます。毎日、放課後もう一コマ分学習することで、普段の授業で理解できなかったことを確認する機会になっているようです。以上、これまでの学習スペースに加えて、学びのポットである第2学生ラウンジもそれなりに活用されています。

一方、12月中旬から1月末にかけては、校長による顕微鏡観察実習が企画されています。近年、医療系分野の基礎医学系教科で組織や細胞の顕微鏡写真やイラストが多く学習教材に取り入れられていますが、本校では、科目の特性上、組織学実習は全くなされていませんでした。そこで、3学科の学生さんの学びを補完するという観点から、様々な細胞や組織を実際に顕微鏡で観察してみようとする補習実習が計画されているのです。どのような学習内容なるかはまだ全体像が明らかではありませんが、少なくとも顕微鏡標本を学生自らが実際に観察することで、今後の学びにとって弾みになると期待されます。



写真AとBはアルツハイマー病モデルマウスにおける大脳皮質の老人斑を示しています。Aの組織切片では老人斑が沢山観察されます。一方、Bの切片は、認知症になりにくい食物を与え続けられたマウス脳では、老人斑が相対的に減少している様子がはっきりと観察されます。このような観察から、アルツハイマー病とは何か、その特徴はどんなことか、どうすればその症状を緩和できるか、などという問題点を学ぶきっかけになると考えられます。